藤原清輔詠の『和漢朗詠集』の漢詩摂取

芦田耕一

藤原清輔（一一〇四―七七）の詠歌に種々の作品から影響をうけて制作されたものが多く見うけられることは既に指摘しておいた[1]が、本論においては『和漢朗詠集』の漢詩からの受容に焦点をあてて論じていこうと思う。

一

清輔詠はおおよそ五五〇首ほど存するとされている[2]が、自撰とされる『清輔集』に四二六首（存疑歌一首を含む）が入っている。これらを検していくと、明らかに漢詩を踏まえて詠まれたと思われるものが見出せるが、その中でも特に『和漢朗詠集』（以下、『朗詠集』とする。なお、『朗詠集』からの引用が明らかな場合は『朗詠集』を省略して書かないことがある。）所収作品との関わりは看過することができないのである。

そもそも清輔は自著の『奥義抄』『袋草紙』に引用作品名を明記してはいないが、『朗詠集』の摘句を上げて、たとえば『奥義抄』中の『後拾遺集』歌を注記するところに、

四　夏の夜もすゞしかりけり月かげはにはしろたへの霜とみえつゝ（注、夏・二二四番）

月照二平沙一夏夜霜と云心也。

というように説明している。摘句は上「夏夜」の白居易作で『千載佳句』にも収められる、

150風吹枯木晴天雨　月照平沙夏夜霜　白

かぜこぼくをふけばはれのてんのあめ　つきへいさをてらせばなつのよのしも

である。こういった事例が散在する。

また、『朗詠集』は歌合の判詞にも取り上げられており、たとえば仁安二年（一一六七）八月催行の「太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合」において、判者清輔は「月」の登蓮作の、

52月影のさえゆくままにおく霜をおもひもあへず鐘やなるらん

に対して、

右、豊山の鐘の心にや、それは、霜降時自鳴、とかや申すめる、されば、秋月似夜霜、云ふ詩にも、欲和豊嶺鐘声否とぞつくられたる（以下省略）

と判じている。「豊山の……霜降時自鳴」は『山海経』五にみられ、「秋月……声否」については、「欲和……」が上「月」の兼明親王作の、

256欲和豊嶺鐘声否　其奈華亭鶴警何　中書王

ほうれいのしょうのこゑにくわせむとするやいなや　それくわていのつるのいましめにいかん

である。「秋月似夜霜」はこの詩題で『朗詠集』には付されていないが、これを収める江戸時代の『日本詩紀』四に「夜月似秋霜」と異同をもってみえる。清輔はこの題を何によって知ったか不明であるが、詩句そのものは『朗詠集』によって学んだとしておいてよいだろう。

これら以外にも、『袋草紙』には「朗詠江注」からの引用が多くあり、また、不二文庫には「伝藤原清輔・寂蓮合筆巻子本（二巻）」が所蔵されている[3]ということがある。

父顕輔も『朗詠集』に馴れ親しんでいたように思われる。長承三年（一一三四）九月十三日催行の「中宮亮顕輔家歌合」において、主催者顕輔が詠んだ、

2終夜ふじの高ねに雲消えて清見が関にすめる月影

に対して、判者藤原基俊は、

一には、雲終夜きゆとよめり、雲は終夜消ゆる物にもあらず、須臾に生じ須臾に滅する物なり

と難じるが、『袋草紙』下に拠れば、顕輔は「証文」を出して、

朗詠集に、「終夜雲尽きて月の行くこと遅し」と申す詩侍り、如何

と反証したので基俊は閉口したという。顕輔が論拠に文書を示したという記事は歌合の判詞には存しない。「終夜雲……」は上「月」の野展郢作で『千載佳句』にも収められる、

253秋水漲来船去速　夜雲収尽月行遅　野展郢

あきのみづみなぎりきたてふねのさることすみやかなり　よるのくもをさまりつきてつきのゆくことおそし

であるが、「証文」の本文とは異同がある。『朗詠集』に従えば、秋の夜空は雲が収まり、雲が月を横切らないので月の進むのが遅くみえるとなるが、一応判詞への反証とはなっているだろう。

なお、この歌合より少し後のものであるが、当詩によって詠まれた歌がみられる。

『夫木和歌抄』冬一の、

久安三年十二月顕輔卿家歌合、冬月　西住法し

6659あだ雲もなき冬の夜の空なれば月の行くこそ遅く見えけれ

であり、同じ主催者によって久安三年（一一四七）に行われており、冬の夜空に雲がないので月の運行が遅いようにみえるというのである。

このように述べてくると、藤原俊成にとって『朗詠集』が座右の書であった[4]ように六条藤家にとっても必読の書であったことは充分に思量せられる。

二

清輔詠と『朗詠集』との関わりについては、諸先学によって既に指摘されているが、ここにいくつかの新しい知見を

も含めて説明していこう。

まず、『清輔集』に収められていない三一首の『久安百首』詠のうち二首を取り上げることから始めたい。

最初の、

946夜を残す老の寝ざめにおきゐつつ秋のともしびかかげ尽しつ

は、木船重昭氏が述べているように[5]、下「老」の白居易作で『千載佳句』にも収められる、

724老眠早覚常残夜　病力先衰不待年　同（注、白）

おいのねぶりはやくさめてつねによをのこす　やまひのちからまづおとろへてとしをまたず

の前の句をそのまま詠み入れた体の歌である。

清輔と親交があった藤原教長（一一〇九―八〇）の『貧道集』に、

さつきのみじかよもめのさめぬればかくなんおもひふしける

321よをのこすおいのねざめにおもひいづるむかしのことぞともとなりける

とみえ、上二句が清輔詠とまったく同じであるので、ここに両歌の直接的な影響関係を想定してもよいのではないか。

いま一首は、

992あさがほのくれをまたぬもおなじこと千とせの松にはてしなければ

である。千年の寿命を保つといわれる松でも寿命があるのだから、夕暮れを待たずに萎んでしまう朝顔も同じだと詠まれる。朝顔が暮れる前に萎む旨の歌は多く詠まれており、既に『堀河百首』秋「槿」の源俊頼作の、

760槿の花のすがたをみつるよりくれをまつべき心ちこそせね

や同じく永縁法師作の、

764世の中のはかなき中にはかなきはくれをもまたぬ槿の花

に見出せるが、『堀河百首』の二首は上「槿」の兼明親王作の、

292来而不留　薤韆有払晨之露　去而不返　槿籬無投暮之花　願文　中書王

きたてとどまらず　がいりょうにあしたをはらふつゆあり　さてかへらず　きんりにゆふべにいたるはななし

に拠っているだろう。人の無常を明け方に消える薤の葉の露や夕暮れになると萎む朝顔に喩えている。

一方、当の清輔詠は松の寿命をも取り上げているので、『和漢朗詠集考證』等が指摘するように上「槿」の白居易作の、

291松樹千年終是朽　槿花一日自為栄　白

しょうしうせんねんつひにこれくちぬ　きんくわいちじつおのづからえいをなす

に学んだことは間違いあるまい。松もついには枯れる時がくる、槿の花は一日の命しかないが精一杯咲いていると詠む。

次に、『久安百首』詠であるが、『清輔集』にも「夕立」として入る（八五番）、

930おのづから涼しくも有るかなつ衣ひもゆふだちの雨のなごりに

を上げよう。『久安百首』に異同はないが、『清輔集』には第四句を「ひもゆふくれの」とする本がある。これは後に『新古今集』夏に、

崇徳院に百首歌たてまつりける時　藤原清輔朝臣

264おのづからすずしくもあるか夏衣ひもゆふぐれの雨のなごりに

と小異をもって入集する。

「なつ衣ひもゆふだち」は『能宣集』の、

（詞書省略）

42からころもひもゆふだちにそほちつつなつのよすがらぬれぎぬやきむ

そして「夏衣ひもゆふぐれ」は『古今集』恋一の、

題しらず　読人しらず

515唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人はこひしき

のおのおの上二句に近い。これらは「唐衣」であるが、清輔詠のように「夏衣」、「ひもゆふだち」の方が爽涼感がある。

当歌は上「納涼」の白居易作で『千載佳句』にも収められる、

159青苔地上銷残雨　緑樹陰前逐晩涼　白

せいたいのちしゃうさんうをけす　りょくしうのかげのまへにばんりゃうをおふ

に拠っている。「残雨」を「残暑」とする本もあるが、「残雨」で解すると、青苔のむす地上には雨の名残りは消え、緑の木陰の辺りに夕方の涼しさを追い求めるの意となる。

当歌が『朗詠集』を踏まえているという指摘はつとに細川幽斎『詠歌大概抄』にみられたが、その後長く閑却されてきたのを最近三木雅博氏によって紹介され、[6]『朗詠集』は「残雨」、『清輔集』は「ひもゆふぐれ」の本文でもって、「涼しくも有るか」「ひもゆふぐれの雨のなごりに」などの表現がこの詩句に基くと説明している。

さらに、三木氏は『頼政集』上の、

夏月

167庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

の上二句が「青苔地上銷残雨」を下敷にした表現であると述べている。源頼政（一一〇四―八〇）は清輔と親しく、ここから先の教長をも含めて『朗詠集』が彼ら共有の知識であったことを窺わせるに足るものと言えるのではないだろうか。

なお、この摘句は『拾遺愚草』や『拾玉集』の句題和歌にも用いられている。

三

『久安百首』の清輔詠を例歌に上げて説いてきたのであるが、諸注が『朗詠集』の影響が考えられるとする清輔詠以外の『久安百首』詠をここに幾首か取り上げてみよう。

崇徳院作の、

19花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき

については、上「閏三月」の清原滋藤作の、

61花悔帰根無益悔　鳥期入谷定延期　（ママ）藤滋藤

はなはねにかへらむことをくゆれどもくゆるにえきなし　とりはたにいらむことをきすれどもさだめてきをのぶらむ

に拠っている。歌は、花は根、鳥は谷に帰るとされているが、人は春の行き着き先を知らないと詠み、詩は、散った花は春がまだ一月あるのに気づき後悔したが無駄であり、谷に帰ろうとした鳥は春がまだあるのを知って帰るのを延ばすであろうの意。

藤原隆季作の、

552すむ水を心なしとはたれかいふ氷ぞ冬のはじめをもしる

は上「花付落花」の菅原文時作の、

117誰謂水無心　濃艶臨兮波変色　（以下二句省略）　同上（注、菅三品）

たれかいつしみづこころなしと　ぢょうえんのぞんでなみいろをへんず

を念頭に置いている。歌は、水が凍るので水は冬の到来を知っていると詠み、詩は、水に心がないと誰か言っているが、花影によって波も色を変えるので心があるの意。

この詩は、『奥義抄』中に、前に述べたのと同じように『後拾遺集』秋・三一一番の歌意の説明として引用作品名を明記せずに取り上げられている。

これらは詩句の一部の表現を取り入れたり、あるいは踏まえた上で、別の素材を加えて詠まれているが、詩句の内容をほぼそのまま詠み込んで一首を成している例がみられるのである。

藤原公能作の、

104梅の花折りてかざしにさしつればころもにおつる雪かとぞみる

は上「子日」の橘在列作の、

30（前二句省略）折梅花挿頭　二月之雪落衣　尊敬

　ばいくわををてかうべにさしはさめば　じぐゑつのゆきころもにおつ

のほぼ直訳的な摂取となっている。

いま一例は、藤原季通作の、

448ことごとにかなしかりけりむべしこそ秋の心をうれへといひけれ

であるが、これは上「秋興」の小野篁作の、

224物色自堪傷客意　宜将愁字作秋心　野

　もののいろはおのづからかくのこころをいたましむるにたへたり　うべなりうれへのじをもてあきのこころにつくれること

を踏襲しており、特に後の句をそのまま詠んでいる体の歌である。

なお、これら四首はいずれも『千載集』に「百首歌」の歌という旨の詞書で収められている。

叙上のように、『久安百首』成立時の久安六年（一一五〇）ころには『朗詠集』に依拠して詠歌する風潮の存したことが充分に窺知せられ、この情況も清輔の詠作活動に多大な影響を与えていると推察されるのである。

四

迂遠なことをしてきたが、ここに清輔詠に戻り、『久安百首』にはなく『清輔集』にだけみられる歌を上げて説明していこう。

「鶯」の、

11なにごとを春の日くらしおもふらん霞の底にむせぶうぐひす

にある「霞の底」にまず注目したい。

この措辞は『清輔集』では他にも「海上晩霞」の、

7夕しほにゆらのとわたるあまを舟かすみの底にこぎぞ入りぬる

にみえ、これらは「霞の中」というような意味であろうか。

「底」を詠み込むものに「郭公声幽」の、

69かざこしをゆふこえくれば時鳥ふもとの雲の底に鳴くなり

の「雲の底」があり、これは『詞花集』雑下の、

　しなののかみにてくだりけるにかざこしのみねにて　藤原家経朝臣

389かざこしのみねのうへにてみる時は雲はふもとのものにぞありける

に倣った思しく、この「底」は辺りの意味であろう。

これらの「霞の底」「雲の底」は『朗詠集』にはまったくみられないが、『本朝文粋』『法性寺殿御集』『本朝無題詩』に頻出する措辞である。(7)

『清輔集』で「底」を含む歌題としては、

　風底荻

112荻原とよそにききつる風の音の袂にちかく吹きすぐるかな

がある。「風底」は『朗詠集』上「擣衣」の具平親王作に、

349風底香飛双袖挙　月前杵怨両眉低　後中書王

　かぜのそこにかとんでさうしうあがる　つきのまへにしょうらんでりゃうびたれり

とみえる。前の句において、衣にたきしめた芳香が漂い、両方の袖が上下している砧をうつ女を述べ、後の句で、月光のもと両眉をたれて遠方の夫を思ってうち沈んでいるさまを詠んでいる。

清輔詠も含めて考えると、「風底」は風の吹いてくる辺りの意味であろう。

清輔詠には見出されないが、「露の底」という表現も『朗詠集』にあり、上「藤」の源相規作に、

134紫藤露底残花色　翠竹煙中暮鳥声　相規

しとうのつゆのそこのさんくわのいろ　すいちくのけぶりのうちのぼてうのこゑ

とみえる。歌では、たとえば『新古今集』秋下の、

百首歌中に　式子内親王

474あともなき庭のあさぢにむすぼほれ露のそこなる松虫の声

のように詠まれる。この措辞は露の降りている辺りの意味であろう。

これらの「〇〇の底」型の表現は院政期から新古今時代にかけて多用されたのであるが、これについて石川泰水氏は「本朝詩における流行表現の和語化であることが指摘されている」と述べている。[8] 清輔はこれらが『朗詠集』にも見出される表現であるので、ことさらにこの流行に従うべく自詠に多く用いたのではないかと思われるのである。

当の一一番歌について、『朗詠集』との関係でいえば「むせぶ」により注目したい。[9]

上「鶯」の元稹作で『千載佳句』にも収められる、

65咽霧山鶯啼尚少　穿沙蘆筍葉纔分　元

きりにむせぶさんあうはなくことなほわかし　いさごをうがつろしゅんははわづかにわかれたり

がある。この前の句を題として『句題和歌』に詠まれており、著名なものであったと思しい。

清輔詠に「むせぶうぐひす」とあることからみて当詩に依拠しているだろう。「むせぶ」は清輔の『和歌初学抄』に「嗚咽也トゞコホリユカヌ也」とある。霧の中でむせぶように鳴く鶯はまだ季節には早いので上手ではないという詩に対して、霞の底で鶯がむせび鳴くのを聞いて春の一日中何を思って鳴いているのだろうかと擬人化して詠んでいる。霧を春の景に相応しく霞に詠みかえて「霞の底」としたのであるが、この表現は鶯の姿は見えないのであるから霞の立ち込めている中あるいは辺りというような意味であろう。

「むせぶ」は『朗詠集』の他の詩にも多くみられるのである。

下「仙家」の紀長谷雄作に、

551虚澗有声寒溜咽　故山無主晩雲孤　山無隠　紀

きょかんにこゑあてかんりうむせぶ　こさんにぬしなくしてばんうんこなり

とあり、冷たい泉の音がむせぶように聞こえるという。また、下「行旅」の慶滋為雅作の、

643暁入長松之洞　巌泉咽嶺猿吟（以下二句省略）　為雅

あかつきちゃうしょうのほらにいれば　がんせんむせんでれいゑんぎんず

があり、岩間を流れる水音がむせぶように聞こえると詠む。そして、下「管絃」の白居易作の、

463（前四句省略）第五絃声尤掩抑　隴水凍咽流不得　五絃弾

だいごのくゑんのこゑはもともえんよくせり　りょうすいこほりむせんでながるることをえず

があり、隴山の川の水が氷に閉ざされて流れることができずにむせぶように聞こえてくるという。

これらは水流を対象とする点で『朗詠集』の六五番詠とは異なるが、この語は『朗詠集』当時の流行表現だったのではないかと思われる。

「むせぶ」は和歌においてどうなのであろうか。

新古今時代からは増えてくるのであるが、これ以前はそれほど多用された表現ではなく、たとえば『後拾遺集』恋二の藤原実方作の、

（詞書省略）

707わすれずよまたわすれずよかはらやのしたたくけぶりしたむせびつつ

がある。「したむせぶ」と表現され、煙にむせるように心の中でむせび泣くという。そして清輔に近くは源俊頼の『散木奇歌集』春に、

霞の歌とてよめる

15春きぬと聞きだにあへぬあけくれにかすみにむせぶまののはぎ原

とみえ、早春の霞に込められてむせんでいるかのような真野の萩原を詠んでいる。清輔詠と同じように「霞にむせぶ」とあるが、鶯は詠まれていない。

なお、『清輔集』には他に「むせぶ」を詠み込む三首を見出すことができる。詞書や歌題は省略に従うが、

78 雲ゐまでふじの煙ののぼらずはむせぶおもひもしられざらまし

262 ひとりねて床のうらわに夜もすがらむせぶけぶりは海士のたく火か

287 しのぶ山したゆく水のたへかねてむせぶおもひをもらしつるかな

とあり、好みの歌詞であった。

次に「月」の、

126 ゆくこまのつめのかくれぬ白雪や千里の外にすめる月影

をみよう。積雪でも馬の爪が隠れないように思えたのは実は遠くまで澄み渡っている月の光であったという歌意で、見立ての歌である。月が千里の彼方まで照らすというのは『朗詠集』に散見されるが、特に次の詩句にヒントを得たものだろうか。

上「雪」の謝観（あるいは賈嵩とも）作の、

374 暁入梁王之苑　雪満群山　夜登庾公之楼　月明千里　白賦

あかつきりゃうわうのそのにいれば　ゆきくんさんにみてり　よるゆうこうがろうにのぼれば　つきせんりにあきらかなり

であり、『江談抄』六に入る。天地すべてが純白な景観を詠む清輔詠と同じく「雪」「月」が詠まれている。この詩は周知のごとく『枕草子』「雪のいとたかうはあらで」に、

あけぐれのほどに返とて、「雪なにのやまにみてり」と誦したるは、いとをかしき物也。

とみえる。「なにのやま」は「群山」をぼかして言ったもの。六条藤家は『枕草子』を歌学書のような意識で読んでいたという指摘がなされており[10]、これによって作られたと思しい歌が清輔詠に幾首か存している[11]。これも『枕草子』にヒントを得たのかも知れない。

これ以外にも、「千里の外」の参考となるものに、上「十五夜付月」の白居易作で『千載佳句』にも収められる、

242 三五夜中新月色　二千里外故人心　白

さんごやちうのしんぐゑつのいろ　じせんりのほかのこじんのこころ

が上げられよう。これは日本文学に大きな影響を与えたが、清輔詠のようには「二千里外」が月光と直接結びつくわけではない。

また、同じ「十五夜付月」の紀長谷雄作の、

244 （前二句省略）千万里外　皆争於吾家之光　紀

せんばんりのほかに　みなわがいへのひかりをあらそふ

があり、十五夜の月が千万里の遠くまで明るくさえわたり、皆自分の家の月が最もすばらしいと思っているという意味である。

三七四番詠は雪と月が詠まれていたが、清輔詠のように見立てではなく、後の二例は雪のことが詠まれていない。月光を雪に見立てるという発想は同じく「十五夜付月」の白居易作で『千載佳句』にも収められる、

243 嵩山表裏千重雪　洛水高低両顆珠　白

すうさんへうりせんちょうのゆき　らくすいかうていりゃうくわのたま

にある。この出典は『白氏文集』六五で「八月十五日夜、同二諸客一翫レ月」のもとに作られた。月に照らされている嵩山は山全体が千重の雪をかぶっているようだと詠む。

このようにみてくれば、清輔は『朗詠集』の三七四番詠や「十五夜付月」の二四二～四番詠に学んだと考えてもよいのではないか。

次は「こまのつめ」を問題にしよう。

この表現は頻出するものではなく、古くは『万葉集』一八の大伴家持作の長歌に、

4146すめろきの　しきますくにの　あめのした　よものみちには　うまのつめ　いつくすきはみ（以下省略）

と「うまのつめ」がみえ、ここは馬の蹄がすり減ってなくなることをいう。そして『江帥集』に、

まかで音声、ふなせのはし

346みつぎものはこぶふなせのかけはしにこまのひづめのおとぞたえせぬ

とあり、馬蹄の音を詠む。

蹄が隠れるという面からみれば、下「草」の慶滋保胤作の、

439華山有馬蹄猶露　傅野無人路漸滋　保胤

くわさんにむまあてひづめなほあらはなり　ふやにひとなくしてみちやうやくにしげし

に倣った可能性が高いのではないだろうか。華山は春の草が若くて馬蹄を隠すほどには生長していないと詠んでいるのである。

「紅葉」に、

177もみぢするおなじみ山の梢にてひとりさめたる岩ね松かな

がある。この「紅葉」歌群（一七五番―八〇）は永暦元年（一一六〇）三―五月ころに披講された『師光百首』の歌と推察される。[12]『類題鈔』に「十座百首」として上がる一〇題各一〇首の一に「紅葉」題がみえ、これに該当すると思われるからである。

当歌は上「紅葉」の大江以言作の、

304外物独醒松澗色　余波合力錦江声　以言

ぐわいぶつのひとりさめたるはしょうかんのいろ　よはのかふりょくするはきんかうのこゑ

に拠っているだろう。『江談抄』四に入る。山全体が紅葉しているのにひとり醒めたようにみえるのは溪間の緑色をしている松だけだと前の句に詠んでおり、清輔がこれを念頭に置いたことは間違いあるまい。

清輔詠と同趣の歌に次の二首がある。

一首は「太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合」の「紅葉」八番左の源伊行作の、

87紅葉ばは紅ふかく成りゆけど独さめたる松の色かな

である。小侍従作の、

88ははそ原しぐるるままにときは木のまれなりけるも今ぞみえける

と番わされる。これは前述のように仁安二年（一一六七）八月に催行されている。判者の清輔は、

左右ともに紅葉をばおきてときは木をよまれたれば題のほいなくや、右はすがたはまさりたれどむげにもみぢみえず、又あやしく、つひにもみぢぬ松もみえけれ、と云ふ歌も思ひいでらるればただ持にて侍るべし

と判じる。清輔は右詠に判詞の多くを費やしており、『古今集』冬の、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人しらず

340雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

を引き合いに出している。伊行詠に対しては、清輔は自らの七年前の一七七番歌を取り上げることもせず、また、冒頭で述べたような相応しい『朗詠集』の漢詩（三〇四番）でもって判じることもしていない。

伊行としては、清輔詠の「ひとりさめたる」という表現―清輔はその新奇さに興趣を覚えたのであろう―に魅力を感じて倣ったのであろうが、判詞で指摘するように清輔詠と同じく「紅葉」題であるにもかかわらず「松」の方にポイントが置かれている。

いま一首は藤原公重（？―一一七八）の『風情集』に「紅葉十首　付落葉　御室にて」として入る、

272まつのみぞひとりさめたるしらつゆのゑひをすすむる木木のあたりに

である。「ひとりさめたる」は今までと同じだが、紅葉が進むのを「ゑひをすすむる」と表現しているのが目新しくて眼目であろう。詠作年時については、「御室にて」とあるので覚性法親王（一一二九―六九）の許で催行された歌会か

と推測され、それならば法親王の薨年以前のこととなる。公重と清輔は活躍時期がほぼ重なり、かつ親交のあったことが知られているので両歌の影響関係を想定してもよいのではなかろうか。

「月三十五首のなかに」とあり、後に『千載集』秋上にも「題しらず」として入る、

157ふけにけるわがよのほどぞあはれなるかたぶく月は又もいでなむ

および「老思残花（菊）」の、

190すぎにけるわがさかりをぞ思ふべきうつろふ菊は又もさきなん

を上げよう。歌体の酷似する二首であるが、前者は沈んだ月はまた昇るが人生の秋は一度限りだ、後者は色あせた菊はまた翌年花を咲かせるが人生の盛年は二度と戻ってこないという歌意であり、ともに人生の無常を詠んでいる。さほど珍しくもない発想ではあるが、二首の詩句にヒントを得たのではないかと思われる。

一首は下「懐旧」の菅原文時作の、

745金谷酔花之地　花毎春匂而主不帰　南楼嘲月之人　月与秋期而身何去　菅三品

きんこくにはなにゑうしち　はなはるごとににほうてしゅかへらず　なんろうにつきをあざけしひと　つきあきとごしてみいづくんかさる

であり、花や月は毎年同じように戻ってくるけれども人間はいったん世を去れば戻ってくることはないと詠む。『枕草子』「故殿の御ために」に、頭中将藤原斉信が「月秋と期して身いづくか」と第四句を誦じている記事がみられる。

いま一首は下「無常」の宋之問作の古来有名な、

791年年歳歳花相似　歳歳年年人不同　宋之問

ねんねんせいせいはなあひにたり　せいせいねんねんにひとおなじからず

であり、花と人間のみを対象とすることでは七四五番詠とは違っている。清輔はどちらかといえば七四五番詠をヒントに月と花とに分けておのおの一首ずつ作ったのではなかろうか。この場合、七四五番詠は花は春の景として上げられており、菊を対象とする清輔詠とは異なっているが、これは清輔が秋の悲哀感を加味しようとしたためではないかと考えられる。

なお、『久安百首』においても清輔は、

915年をへて我が身はあらずなりゆけど花のすがたはかはらざりけり

と同趣の歌を詠んでいる。

「竜門廿五名所中」の、

362あま人のむかしの跡をきてみればむなしきゆかをはらふ谷風

を検討しよう。「竜門」は仙僧が竜門滝で修行し庵室を構えた地とされる。初句「あま人」はもともと天女のことであり、ここは仙人の意の「やま人」の誤写ではないかと推察される。げんに『清輔集』に「やま人」や「あま人（や歟）」とみえる本があり、これを入集する『千載集』雑上（一〇三九番）は「山人」とある。

「むなしきゆか」は『大弐高遠集』に、

一生遂向空床宿

266うちはへてむなしきゆかのさびしさにしばしまどろむときぞすくなき

と詠まれ、独居生活の寂しい寝床をいう。

「風が払ふ」という措辞は『久安百首』の藤原季通詠に、

436秋の夜は松をはらはぬ風だにもかなしきことのねをなかずやは

とみえ、『千載集』秋下にも「崇徳院に百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめる」（三〇四番）の詞書で入っている。この措辞は『和漢朗詠集考證』等の諸注釈が指摘するように下「管絃」の白居易作の、

463第一第二絃索索　秋風払松疎韻落　（以下四句省略）　五絃弾

だいいちだいにのくゑんはさくさくたり　あきのかぜまつをはらてそゑんおつ

に拠る。先の清輔詠一一番歌の「むせぶ」で当詩の第五、六句を引いている。詩が琵琶の絃を鳴らすともの寂しげな音がし、秋風が松の枝を通ってざわざわと音を立てるというのに対して、季通詠は秋の夜は松を吹かない風でさえも悲しいことを思わせる琴の音をたてていると詠む。共通するのは「松を払う風」「琴（琵琶）」であり、季通詠は当詩を意識した内容となっている。

ところが、清輔詠は風が松を払うというわけではなく、また楽器ともなんら関わっていないので、『和漢朗詠集考證』等が指摘するように下「仙家」の菅原文時作の、

547石床留洞嵐空払　玉案抛林鳥独啼

せきしゃうほらにとどまてあらしむなしくはらふ　ぎょくあんはやしになげうてとりひとりなく

の前の句に従っていると考えるべきだろう。洞穴の中に残る仙人の石の寝台を嵐が空しく吹くばかり、林の中に捨てられた玉の机を鳥が訪れて悲しげに鳴くのみだという。清輔詠の「むなしきゆか」はここは洞穴の中の石床である。

なお、当詩は引用部分を含む五四六―九番の四連でもって一つの詩を成しており、仙人が昇天したあとの景物を主に詠む最初は、

546丹竈道成仙室静　山中景色月華低　菅三品

たんさうみちなてせんしつしづかなり　さんちうのけいそくはぐゑつくわたれり

であり、この仙人は丹薬をかまどで練って仙道を修めたという。清輔は二人の仙人をオーバーラップさせる意図でもってこの歌を作ったのではないだろうか。

最後に、「月三十五首のなかに」の、

146しきたへの枕におつる月みればあれたる宿もうれしかりけり

を上げよう。これは以前に論じたことがあるが[13]、清輔詠には他にも、

森間寒月

218冬がれの森の朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさむけさ

と「おちたる月」という表現がみられる。意味からして「もれたる月」でよいはずであるが、このように詠んだのは『古今集』秋上の、

題しらず　よみ人しらず

184このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

の「もりくる月」が清輔本『古今集』では「お（を）ちたる月」とあり、この本文の正しさを主張するための営為であると述べておいた。

しかし、当歌を「おつる月」ではなく「枕におつる」という観点から考えることもできるのではないか。佐藤恒雄氏はこの表現は和歌の独創ではなく、平安中末期の漢詩の中に数多く見出せる「落枕」の和語表現であると論じている[14]。これは『朗詠集』とほぼ同じころ成立の『江吏部集』や清輔晩年期の『本朝無題詩』から拾い出すことができるが、今までの例からも清輔は『朗詠集』に学んだのではないかと思量される。当歌の用例が最も早く、他を介してではないと推察されるからである。該当するのは下「隣家」の菅原文時作の、

575落枕波声分岸夢　当廉柳色両家春　菅三品

まくらにおつるなみのこゑはきしをわかつゆめ　すだれにあたれるやなぎのいろはりゃうかのはる

である。枕許に近く聞こえる波音は岸を隔てた両家の人の夢の中に入るというのが前の句の意味であり、清輔は荒廃した家の枕許近くに差し込んでくる月のすばらしさを詠んでいる。

このようにみると、家証本の本文の優秀さの誇示、『朗詠集』の摂取のどちらが積極的に清輔をして当歌を詠ましめたのか明らかではないが（多分両方を意図していたのであろう）、いずれにしても清輔にとっては「枕におつる月」という措辞はぜひとも必要であったことは否めないと思う。

五

以上、藤原清輔と『朗詠集』との関わりを中心に据えて論述してきたのであるが、当時の歌人たちにとって『朗詠集』は必須の知識であり、その影響力をあらためて認識することができたように思う。清輔もそういう情況の中にいたわけであるが、清輔の『朗詠集』への態度は先のいくらかの点および清輔の性格から鑑みて、人の歌に倣うことで間接的に知ったのではなく、直接学んだ上で詠歌に生かしたのではなかろうか。

あるいはまた、清輔と親交のあった教長、頼政、公重が清輔と同じ漢詩を用いて詠歌していることは、たとえ当時の情況が前述のようであったとしても看過できない事実ではないかと思われ、まったくの臆測だが、気の合った歌人グループの中で勉強会があり、かつその成果を発表する場が存在したのではないかとも考えられるのである。

注

（1）拙著『六条藤家清輔の研究』所収「第二章　藤原清輔の詠歌」
（2）日比野浩信氏「『清輔集』の一性格―歌合歌の入集を中心に―」（樋口芳麻呂氏編『王朝和歌と史的展開』）
（3）新潮日本古典集成『和漢朗詠集』の「解説」
（4）柳澤良一氏「院政期和歌と白居易―藤原俊成の歌論・和歌について―」（『白居易研究講座』第三巻）
（5）『久安百首全釈』
（6）『平安詩歌の展開と中国文学』所収「雨後の爽涼―白氏文集詩句の改変と新しい自然詠の誕生―」
（7）藤平泉氏「「霞」題歌の変遷（3）―西行・歌林苑歌人を中心に―」（「神戸女子大学紀要」二七巻文学部篇（国文学）平六年三月）、および北山円正氏のご教示に拠る。
（8）『歌ことば歌枕大辞典』「底」の項
（9）佐藤恒雄氏「新古今的表現の基盤としての平安朝漢詩―「霞におつる」「岩間にむせぶ」「はらひはてたる」の場合―」（「日本文学」昭五十四年六月。のち『藤原定家研究』に所収）に詳しい。
（10）久保田淳氏『藤原定家』（『王朝の歌人』9）
（11）久保田氏「枕草子の影響　中世文学」（『枕草子講座』第四巻）、および（1）の拙著所収「清輔の反伝統的詠歌」
（12）詳しくは（1）の拙著所収「『清輔集』の成立について」を参照のこと。
（13）（1）の拙著所収「清輔の詠歌と清輔本『古今集』」
（14）（9）に同じ。

（付記）和歌および『和漢朗詠集』は『新編国歌大観』、『奥義抄』は『日本歌学大系』、『枕草子』『袋草紙』は『新日本古典文学大系』に拠る。ただし、『和漢朗詠集』の訓みは漢詩のあとに付した。